

夏目漱石

子規の画





# 子規の画



余よは子規しきの描かいた画えをたった一枚持もっている。亡友むつゆうの記念かたみだと思おもって長い間まそれを袋ふくろの中なかに入れて仕舞しまっておいた。年数ねんすうの経たつにつれて、ある時はまるで袋ふくろの所在しざんを忘れて打ち過すぎること多おほかった。近ちかごろふとおもい出して、あゝしておいては転宅てんたくの際きわなどにどこへ散逸さんいつするかもしれないから、今のうちいまのうちに表具屋ひょうぐいやへ遣やって懸物かけものにでも仕立しだてさせようという気が起おこった。渋紙しぶしの袋ふくろを引ひき出して塵ちりを払はいて中なかを検しらべると、画えは元もとのまゝ湿しめつぽく四よっ折おりに畳たたんでああった。画えのほかに、ないと思おもった子規しきの手

紙も幾通か出てきた。余はそのうちから子規が余に宛てて寄こした最後のものと、それから年月の分らない短いものを選び出して、その中間に例の画を挟んで、三つを一纏めに表装させた。

画は一輪花瓶に挿した東菊で、凶柄としてはきわめて単簡なものである。傍に「これは菱み掛けたところと  
 思いたまえ。下手いのは病気のせいだと思いたまえ。嘘  
 だと思わば肱を突いて描いてみたまえ」という注釈が加  
 えてあるところをもつてみると、自分でもそう旨いとは  
 考えていなかっただろう。子規がこの画を描いた時は、

余はもう東京にはいなかった。彼はこの画に、あずまぎく東菊活  
けて置きけり火の国に住みける君の帰り来るがねという  
一首の歌を添えて、熊本まで送ってきたのである。

壁に懸かけて眺ながめてみるといかにも淋さびしい感じがする。

色は花と莖と葉と硝子ガラスの瓶びんとを合あわせてわずかに三み色しか  
使つかってない。花は開いたのが一輪つぼみに蕾つぼみが二つだけであ  
る。葉の数を勘定してみたら、すべてでやっとな九枚あつ  
た。それに周囲が白いのと、表装の絹地が寒い藍あいなので、  
どう眺めても冷たい心持が襲襲ってきてならない。

子規はこの簡単な草花を描くために、非常な努力を惜おし

まなかつたようにみえる。わずか三茎みくきの花に、少くすくなとも五六時間の手間てまを掛けて、どこからどこまでたんねんに塗り上げている。これほどの骨折ほねおりは、たゞに病中の根気仕事としてよほどの決心を要するのみならず、いかにも無雑作むぞうさに俳句や歌を作り上げる彼の性情からいっても、明あきらかな矛盾である。思うに画ということに初心な彼は当時絵画における写生の必要を不折ふせつなどから聞いて、それを一草一花のうえにも実行しようとして企てながら、彼が俳句のうえですでに悟入した同一方法を、この方面むかに向つて適用する事を忘れたか、または適用する腕がな



かったのであろう。

東菊によって代表された子規の画は、拙ますくてかつ真面まじ目めである。才を呵かしてたゞちに章をなす彼の文筆が、絵えの具皿ぐざいりゅうに浸ひたると同時に、たちまち堅かたくなって、穂先の運う行ぎょうがねっとり竦すくんでしまったのかと思うと、余は微笑えいごうを禁かぎじえないのである。虚子きよこが来てこの幅あしを見た時、正岡まさおかの絵えは旨うまいじやありませんかと言いったことがある。余はその時、だつてあれだけの単純な平凡な特色を出すのに、あのくらい時間と労力を費たさなければならなかつたかと思うと、なんだか正岡の頭と手が、入らざる働はたらきを余儀

なくされた観があるところに、隠し切れない拙が溢れて  
いると思うと答えた。馬鹿律義なものに厭味も利いた風  
もありようはない。そこに重厚な好所があるとすれば、  
子規の画はまさに働きのない愚直ものの旨さである。け  
れども一線一画の瞬間作用で、優に始末をつけられべき  
特長を、咄嗟に弁ずる手際がないために、已を得ず省略  
の捷徑を棄てて、几帳面な塗抹主義を根氣に実行した  
とすれば、拙の一字はどうしても免れがたい。

子規は人間として、また文学者として、最も「拙」の  
欠乏した男であった。永年彼と交際をしたどの月にも、

どの日にも、余はいまだかつて彼の拙を笑いうるの機会を捉え得た試がない。また彼の拙に惚れ込んだ瞬間の場合さえ有たなかつた。彼の歿後ほとんど十年になろうとする今日、彼のわざ／＼余のために描いた一輪の東菊のうち、確たしかにこの一拙字を認めることのできたのは、その結果が余をして失笑せしむると、感服せしむるとに論なく、余にとっては多大の興味がある。たゞ画がいかにも淋しい。でき得るならば、子規にこの拙なところをもう少し雄大に發揮させて、淋しさの償つぐないとしたかった。

(明治四四・七・四)



日本文学電子図書館

---

子規の画

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第8巻」角川書店  
昭和42年10月10日5版発行

---



日本文学電子図書館